

アジア・太平洋戦争と日本の宗教研究

学史からのアプローチ

西村明

The Asian-Pacific War and Religious Studies in Japan : Approach from the History of the Discipline
NISHIMURA Akira

はじめに

- ①戦争と日本宗教学会
- ②『宗教研究』誌に登場する戦争研究
おわりに

【論文要旨】

本稿は、アジア・太平洋戦争期の宗教学・宗教研究の動向、とくに戦時下の日本宗教学会の状況と、当時の学会誌に表れた戦争にかんする研究の二つに焦点をあて、当時の宗教学・宗教研究のおかれた社会的ポジションの理解を試みるものである。

戦時期の一九三〇年・四〇年代前半は、日本宗教学会の草創期にあたり、宗教をとりまく大きな状況の変化が起った時期でもあった。学術大会における会長挨拶では、同時代の状況にたいする当事者的参加が要請され、諸宗教の理解という学問的関心の

社会的意義が強調されたが、それは同時に本国や占領地等における政府の宗教統制・宗教政策と奇妙な同調を見せる結果となっている。

一九四〇年前後に『宗教研究』誌に登場した、戦時下の宗教現象にかんする論考は、千人針などの当時の前線・銃後の日本人たちの宗教的・民俗的営みを視野に入れたものであったが、あくまで戦争遂行や天皇にたいする尊崇を第一義とするような体制的な価値判断に基づくものであったと言える。

はじめに

「戦争と宗教研究」、このことばのつながりは二通りに解釈できよう。ひとつは「戦争と宗教研究」であり、もうひとつは「戦争」と「宗教研究」である。

「戦争と宗教研究」とは、言い換えれば、戦争と宗教とのあいだの相関関係を研究することである。例えば、宗教思想などが戦争に与える影響の研究や戦争が宗教（教団・実践・思想など）に与えた影響の研究⁽²⁾、そして戦争のもつ宗教的次元の研究などが挙げられる。とくに戦争が宗教に与えた影響についての歴史的考察は、アジア・太平洋戦争について日本語で発表された研究に限定しても、全体を網羅的に概観するのが困難なほど、さまざまな事象をとりあげた研究の蓄積がある⁽⁴⁾。

他方、「戦争」と「宗教研究」という主題についてはどうだろうか？

近年、宗教研究についての学説史的な研究がさかんに進められてきているが、アジア・太平洋戦争と日本の宗教研究の関係にしばって考えた場合、そこに積極的に焦点をあてた研究となると、意外にもその数は多くない⁽⁵⁾。それ以外には、通史的流れの中で個々の研究者の戦時期における言動を位置づけたものがある程度であると言えよう⁽⁶⁾。本稿では、このような研究動向を踏まえて、研究の蓄積に資するために、アジア・太平洋戦争期の宗教学・宗教研究の動向に焦点をあて、とくに戦時下の日本宗教学会の状況と、当時の宗教学誌に表れた戦争についての研究の二つの視点から、当時の宗教学・宗教研究のおかれた社会的ポジションを理解してみたい。

①戦争と日本宗教学会

一九三四（昭和九）年に発行された『宗教研究』八〇号には、短いことばながらも、当時の緊迫しつつある時代状況のなかで、宗教や宗教研究の直面することになる事態を予言しているかのような「後記」が掲げられている。

「△言論界は弾力に富まぬ混沌に低迷してゐるやうである。やがてこのことはある時代の歴史が示したやうに宗教への触手となりはすまいか。それらにそなへて学を蓄へべき（ママ）であらう。△一九三四年が来る。この国にも亦内的外的に宗教界にさしせまつた問題が近寄りつゝあるのではないか。（中略）△民族意識の復興よし、が、機関誌としての本誌はその分を守らう。」

——以上を種々の問題の答となして——（後略）（T・I
一九三四）

三年前の一九三一年に起つた満州事変のあと、戦争への一方通行的な道を行んでいる日本社会の状況のなかで、民族主義的な言論が活発となつてゆき、信仰の自由が蝕まれかねない危機の予感が表明されている。一九三〇年に日本宗教学会（以下、宗教学会）が創設され、宗教学がいくつかの大学の講座をまたぎ、また宗教学の講座には所属しない宗教研究者をもつた全国組織として歩みはじめた黎明期は、ちょうど日本が戦争へと進んでいく時代と歩みを共にしていたわけである。この「後記」が書かれた一九三四年時点での『宗教研究』誌は、宗教研究会の機関紙であり、宗教学会の会誌となるのは一九三八年以降である。

日中戦争の始まる直前の一九三六年一月二十八日に開かれた宗教学会第四回大会では、会長の姉崎正治が会長挨拶のなかで、創立からの六年のあいだの宗教状況とそれをとりまく社会状況の展開を次のようにまとめている。

「大会も今回で第四回であるが、回顧すれば此の僅な間に反宗教運動が起こり、新興宗教が続出。是等のみならず其他の有ゆる社会事象に、つまり人心の動き方に、可なり刺激的なものや変態的なのが認められ、何か世の中の変異といふものが感ぜられる。

吾々宗教研究者にとつては是等は非常に良い材料である。古来の宗教史を見てもその結果は一定しないまでも、是れに似たものが屢々起つた。一体吾々の研究は物理化学の様に特別な仕掛けを設けて実験してみることが出来ないで、現在起こりつゝあることを過去に照し合せて研究するより仕方がない。そしてそれによつて現在将来を概括するより仕方がない。(中略)而も吾々は此等の事象に關して単に傍観者として居るわけにはゆかない。それと同一の社会人、同一の国民として矢張りその当事者でもあるのである。よそごとの様に見守つて居ることは出来ない。従つて是等動搖に伴ふ何者と雖も憫みにも、喜びにも、迷ひにも、希望にも、総てに吾々は参加しなければならぬ。(後略)」「〔宗教研究〕一〇二a号」

ここには、戦争への言及は見られないが、宗教研究者として、宗教をとりまく状況の変化に学問的に敏感であることが求められていると考えているようである。宗教学会の黎明期は、戦争の入り口であったのと同じ時に、それに連動して宗教界をめぐってもさまざまな変化がもたらされた時期でもあったのである。たとえば、一九三二年五月の上智大学生の靖国神社参拝時の礼拝拒否事件をはじめ、一九三四年に奄美大島の大島高等女学校の廃校事件にいたるカトリックへの排撃の動きが盛んとなつて、結果的に教会として学生・信徒の神社参拝が容認され、国防献金など戦争協力への歩みも開始された時期であった。また、一九二五年の治安維持法の成立と二八年の改定によつて一九三〇年ごろまでに共產主義

運動の取締りが一段落すると、三五年に不敬罪・治安維持法違反で大本教の出口王仁三郎らが逮捕され、教団施設が破壊される第二大本教事件がおこり、三六年にはひとのみち教団の弾圧がおこるなど、その後も引き続き起こつていった宗教弾圧が展開され始めた時期であった。しかし他方では、ちょうど宗教学会創設の一九三〇年に谷口雅春が開教した生長の家や、三五年に岡田茂吉が開教した大日本観音会(のちの世界救世教)をはじめ、いくつかの新宗教教団の勃興期でもあったのである。姉崎はこのような当時の宗教状況を念頭において、宗教研究者はたんなる傍観者ではなく当事者としてもその状況に参加すべきだとしているが、それは研究者としておこなえる同年代的な批判や提言を積極的になすべきだという意味であつたようだ。ところが、姉崎がそこまで意図するところであつたかは別にして、この当事者性の強調が、この大会に寄せられた文部大臣平生鈺三郎の祝辞と奇妙な共鳴を見せていることは見逃せない。

「〔前略〕神道仏教基督教等の諸宗教に關し、學術的検討を加へ宗教の真諦を闡明せんとせらるるは、誠に機宜に適せる好學と謂ふべく、民心の帰趨を明らかにし健全なる宗教の振興に資するところ少からざるを思ひ欣快に堪へないのであります。

(中略)會員諸氏は深く思を時潮の動向に致され、孜孜研鑽を積み、克く相互の連絡統制を保ち、以て本邦宗教学の發達に貢獻せられますことを切望する次第であります(後略)」「〔宗教研究〕一〇二a号」

三年後の一九三九年成立、四〇年施行の宗教団体系法をうけて、翌四一年には国内の諸宗教教団は神道一三派、仏教二八派、キリスト教二教団に統合されて、完全に政府の統制下に組み込まれたかたちへとなつていく。また、宗教研究者たちのなかにも植民地・占領地の宗教統制のため

の一翼を担うようになる者が現れたが、上記のふたつの挨拶文の共鳴は近未来の状況をやはり予感させるものであった。

その後、宗教学会の学術大会そのものも戦争のなかに巻き込まれたかたちとなる。日中戦争以降の第五回大会（一九三八年）、第六回大会（一九四〇年）、第七回大会（一九四二年）では、開会にあたって、「来会者一同起立、皇軍の武運長久のため、また護国の英霊に対して一分間の黙祷」など「国民儀礼」とよばれるプログラムが入ってくるようになった。とくに一九四二年の第七回大会は靖国神社の臨時大祭と時期が重なっており、会長の姉崎は挨拶のなかでそのことに言及し、戦時下の状況のなかに宗教学を位置づけている。

〔前略〕この大戦の最中に、かくも安泰に相会して学問の為に尽し得るのは、実に皇恩国恩の渥きによる事と今更ながら感佩の情いや深きを覚える。又此日は特に靖国神社臨時大祭の間にあることを思へば、今回合祀せられた護国の英霊と共に、今までに、国の為に一命を捧げた幾方の英霊に対して、特に追悼と感謝の思を致さざるを得ぬ次第である。（中略）南方の共栄圏に関して、今まで、又今でも、世には、政治と経済方面に着目して、其の他に及ばない人が多い。此も自然の事ながら、愈よその方を軍政の翼下に収めてその諸民族を統治する様になつて見て、少くとも責任ある一部の人々は、其等民族の間に於ける宗教生活の意義を知り始めた様である。而して此の為には現在に於ける宗教の実情を知ると共に、その来歴や、又隠れた力をも究明する必要は、漸く認められる様になつてゐるらしい。（中略）実に我国自らの問題であり、其が又全世界の問題であらう。此事は我等年来の所見であり、本学会の会員が、世間の実利的風潮をよそに、世の名利を顧みず、各自此方面の研究に従事して来たのは、我等の学問が人類文化の上に重大の意義あるを自覚して来た

為であろう。（中略）われらの学問が将来の文化に対して、如何の意義を有するかということを目覚して、一層弘く又深く、この研究を進めるべきである。

現在、戦乱の渦中にあつても、諸民族の生活に於ける宗教の重要なことは、今までに変わりはないが、今後、戦争を経過して、真に文化建設に進むに当つては、宗教の嚮道が一層加はるべきは明である。〔宗教研究〕一一四号）

冒頭の部分は、将兵が海外において激しい戦闘で死をかけて戦うことと日本国内で穏やかに学問を営むことが、動と静のように対比的に浮かび上がってくるような表現である。そして後半部分は、大東亜共栄圏の構想の実現に際して諸民族の統治上、政治・経済的観点だけでなく、当該地域の宗教の現状や歴史、その潜在力等を理解することが不可欠なものとなってきたという状況認識を示すものとなっている。さらには、戦後の問題としても「文化建設」を図る上で、宗教が社会的重要度を増すという理解が認められ、一九四二年段階での姉崎の戦後ヴィジョンがうかがえて興味深い。

しかし、このような姉崎の挨拶は、またもや文部大臣（橋田邦彦）の祝辞と共鳴する。

〔前略〕国民の精神を鼓舞振作して不退転の信念を培養すると共に大東亜諸民族相互の理解親善を促進してその團結を強化するは現下喫緊の要務にして本大会の成果に期待すべきもの極めて多し〔宗教研究〕一一四号）

国民精神の作興と植民地・占領地での精神的な統治にたいし、学会の成果が期待されており、そのような政治的期待と諸宗教を理解するとい

う宗教の学問的課題が奇妙に合致したかたちとなっている。その結果、姉崎のことは政治的色彩を帯びて横滑りする効果を持ってしまうのである。

この時期、このような次元での学問の動員が始まっていることは、一九四〇年の『宗教研究』一〇四号に発表された石橋智信「鮮・満・支の宗教実情踏査」にうかがえる。石橋は一九三九年の夏、興亜院からの委嘱で文部省の相原宗務官と、朝鮮半島・満州・中国における一ヶ月半の宗教調査を実施しており、現状分析から「宗教工作」や「宗教上の東亜新秩序」のあり方を提言している。

「もし、宗教工作なるものが、真に、宗教なるものを愛し、また、支那人なるものを愛してのそれであるならば、支那人たれもが信じ、支那人たれもが有する宗教的関心に生くる道教なるものの上に、宗教工作の第一歩が踏み出されねばならぬ。我が宗教工作と支那人宗教心との最初の接触点が見出されねばならぬ。(中略)

真に、宗教を愛し、真に、支那を愛するならば、唯一の純支那宗教、道教を愛して、これを赤ん坊の様に愛撫し、これを育ててやる可きであらう。これらも育てゆくべき宗教上の東亜新秩序の一ではあるまいか。支那人の育て上げ方ではあるまいか。」

ここでの宗教への愛、あるいは宗教の理解という姿勢は、人間的な水平的視点で論じられていないことに注意すべきである。「これを赤ん坊の様に愛撫し、これを育ててやる可き」という母性的包容として表現されているが、実際には民族を異にする者のあいだの優劣関係を前提とした垂直的なパターンリズムがその陰に潜んでいたのである。

②『宗教研究』誌に登場する戦争研究

太平洋戦争が開戦し、宗教団体が成立する一九三九年、姉崎の弟子の一人で立正大学教授であった濱田本悠は『宗教研究』一〇一b号に「日本宗教の現代的問題」を発表した。『宗教研究』誌において、宗教学の視点から戦争を主題的に論じたものとして注目に値するだろう。

濱田はまず、議論の前提として、すべての宗教には現実世界の不安定に立脚し、心や自己をとりまく環境の平安をねがう「危機の神学」として、およそ戦争とかわりを持つてしていると論じる。日本の宗教史上でも、「三種の神器」のひとつに剣があるように、かつてより現在まで戦争の要素が含まれていたととらえ、「戦争は一種最高の宗教であった」とさえ述べる(濱田 一九三九・一六一―一六二)。

そして、当時の戦時状況における戦争と宗教のかかわりの深さを示す事例として一方で「千人針」や「弾除け」祈願をあげ、他方で戦死をめぐる「無常観の宗教」をあげながら、最終的には政治思想としての皇道主義ではない「皇道」「尊皇」の宗教性を論じる方向に議論を進めている。濱田は千人針への関心は「士気や報国の意図」を弱めるものとしてではなく、むしろ人の力を超えた偶然性をコントロールする方法として理解する。

「斯やうな戦闘技術に就いて、人力以上の偶然率を統御する方法として、稍々宗教的方法が考案せられたものが「千人針」行事である。或は「千人力」奉仕である。斯やうな街頭行事が性的区別を設けて、或は一針を、或は一筆を女性男性に分けて奉仕せしめ、特定の年廻り(寅年の者、五黄の寅年の者等)に限り数多く運ばしめたり、又奉仕者が必ず別々の千人でなければならぬことや、又

は特定条件のもの（五錢玉を結ばしめる等）に之を一針一筆以上行ふことが許される等の行事は、正しく宗教儀礼に特有の「戒律」やタブー（禁忌）の固有型が現はれて居る。しかしそれは、何人が立法したと云ふこともなく、自然発生的に行はれ出した原始形態を採って居ることは、現代文化社会に尚ほ原始性が頭を擡げる戦時雰囲気の特徴と見てよい。」〔濱田 一九三九・一六二〕

ここで濱田は、「千人針」行事が運針などをめぐって戒律やタブーといった宗教儀礼の特徴を兼ね備えていることを指摘し、しかし、それが誰かの創出によるものではなく、自然発生的なものであって、戦時雰囲気のもつ原始性と通底する性格であると論じる。さらに引用部に続けて、戦時に多用された「お守り」「お札」などのなかには神霊の観念を伴わない場合もあり、それらは「魔術 Magic」、巫女的考案に基づく「魔除け」の性格を残存させたものであるが、「不動や清正公の神観念」といった宗教観念に結びついている部分を有する」と指摘している。したがって、濱田がここでおこなっている議論は、進化的な宗教学説を用いながら、「千人針」という戦時下の社会現象を宗教性のひとつの現われとして読み解いていくものであったと言える。

濱田は次に、戦争の長期化によって、前線での戦闘とそれにむけた国民の総動員と同時並行で、戦死者の一周忌や三周忌が勤められる事態に目を向け、戦地における巡礼の動きの興味深い事例を紹介している。

「中には戦火尚耐なる陣中に念珠つまぐりつつ巡礼回向をして廻る將軍や戦傷兵や、僧侶団がある。殊に痛ましいものは、その際敵霊をも尚同時に弔ふ気持にまで深化しつつあるやうである。そこには已に仏教に云ふ怨親平等の普遍愛の宗教までが芽崩えつつある。軍事当局では、そう云ふ運動が、反って軍の士気に関するなきやを顧

慮したほどに、巡礼志願者が多かった。」〔濱田 一九三九・一六四〕

一九三九年当時にこのような戦地での宗教実践があったという事実の存在を、筆者は算間にして知らないが、濱田はそれを戦闘のなかで生死の境界を体験したもののだけが到達できる、無常観の宗教であるとす。そして、そのような「戦時体験の無常観」が「靖国信念の昂揚、興亜忠霊塔の建立」の気運となって表れていると理解している。無常観の宗教を体験した者は、生死の境を超越しようとして、生きながらにして「戦死の神秘」を味わうことが求められているとする。濱田は忠霊塔建設運動のスローガンであった「一日戦死」を、たんに一日だけ戦死したつもりで労役を果たすという意味においてはなく、上記のような生きながらにして戦死を味わうことを表す「怪奇的標語」であると述べ、「事変参加の日本人でなくば、戦火を浴びた将兵でなくば感触できない宗教感情であり神秘信念の発声である」とさえ言う。

当時の日本における戦争にまつわる宗教的状况を仏教やキリスト教への信仰に還元できない「全く日本的なる大稜威信念に開眼したもの」であると理解し、占領地等の海外神社の創建の動機を「生々しい現地の慥体験」と結びつけている。戦争を人生の究極体験ととらえた上で、そこに宗教性の発露の要因を認めるのである〔濱田 一九三九・一六四―一六五〕。

濱田はこのような無常観の宗教を異常心理的宗教と評し、日本社会に妖しい雰囲気を漂わせているとする。さらには長期化する戦争を経て、日本的な無常観が徹底されていくことで、そうした無常観や神秘信念より宗教的により高い「事変以後に来るべき」社会宗教として「皇道（皇国）信念」をあげている。

この皇道信念は、戦争前には皇道主義という国民精神の指標に過ぎなかったものが、戦争による空前の国家的な非常事態によって、宗教的に

なったものだという。戦地における朝日の「遥拝」や戦死者への「黙禱」などは、皇道信念という宗教性の儀礼的側面（三昧、禪定）であり、「国民の戦時的第一義的信仰」であるとされる。ただし、他方で、「皇道」の思想には非宗教的な国策的意図も潜在しており、制圧や訓令のかたちでそれが提唱されると、かえって宗教的信念の自然湧発をせき止めることになるかと警告している。

このように濱田の議論においては、進化主義的な宗教論に基づいて千人針や戦死者への儀礼的態度のうえに、天皇崇拜の宗教的次元をおくものであり、国民を戦争へと向かわせるイデオロギーを政府以上に極端なかたちで提示するものとなっている。

濱田が上記の論考を『宗教研究』誌に寄稿した翌年の一九四〇年の一〇六号には、陸軍教授の心理学者西澤頼応が第六回大会の発表論文として「日本戦史に現はれたる宗教体験」を載せている。⁽⁸⁾

西澤は問題設定として、「戦場に於て体験せられた信仰の諸相を考察して、日本の国民性によって特色づけられた宗教意識の問題にふれて見ようと思ふ」と述べ、日本の歴史上の戦争について、戦史資料に基づいた戦争体験の宗教心理学的考察を行っている〔西澤 一九四〇：二二四〕。取り上げられた資料は参謀本部編纂の『日本戦史』をはじめ、井上一次中将、辻善之助監修の『大日本戦史』、『日本戦史集』、『日本外戦史』などであるが、国立歴史民俗博物館『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』との関連で興味深いのは、それらの資料と共に「満州事変・日支事変に参加したる歴戦将兵の体験談」二千五百名分ほどが挙げられている点である。当時の学術的関心から収集された戦争体験の記録という意味で重要であると思われるため、西澤が「宗教体験の諸相」と題して紹介している同論考の第二節の記述から、満州事変と日中戦争（日支事変）と表記）にかんする部分を少し長くながるが抜き出しておくことにしたい

〔西澤 同上：二一五—二二五〕。

- (一) 軍神【省略】
- (二) 血祭【省略】
- (三) 祈願【省略】
- (四) 神託【省略】
- (五) 縁起【省略】

(イ) 出陣時【省略】
(ロ) 戦闘時、戦闘後

①～⑧【省略】

⑨ 戦闘前、山の中に実って居った栗を勝栗だと縁起を祝った。
—日支事変—

⑩ 毎日日記をつけて居る人には生存者が少ない。不思議と思はれ程である。—日支事変—

⑪ 千人針や、御守を無くしたので、赤禪を締めて居たが、徐州戦では負傷してしまった。余り縁起は信用することが出来ない。

⑫ 討伐の命を受けて出発する際、突然に靴の紐が切れた、その日は敵の重囲に陥り戦友を失ってしまった。

戦況が緊張して、真剣になればなるほど、吉と考へることよりも、不吉を予感することが多くなって来る様である。それ程吉と考へる余裕がないと見るのが当然であらう。

(六) 占ひ【省略】

(七) 千人針 千人針に対する信仰は可なり強い。それには多数の人々の熱心と誠意と云ふことが将兵の心を勇気づけて居る。

① 危い処で助かった時等は、確に千人針を下さった人々が、自分に対する武運長久を祈って下さったものであると信じて

居る。―日支事変―

② 母の作った千人針を、ひとり頼りにして戦って来た。

③ 弾薬を交付した帰りの途中に、不意に敵弾を受けた折、各被服は通り抜けたが、千人針を巻いて居ったお蔭で敵弾は貫くこと能はず、幸に故障なく過ぎることが出来た。実に千人針の縁起よきこと、又大なる力あることを感心した。―日支事変―

千人針に対する信頼心が強い程、紛失した場合に感ずる心的不安は可なり大きいものがある。

④ 千人針を忘れた。それが非常に気になった。不思議なほど気になったので、戦友のを貰って着用するに及んで、やっと精神に落ち着を感じた。

⑤ 「マリリヤ」を思ったが、之は身から離さない千人針を落した為であると思った。

千人針を信じないものがある。

⑥ 戦場では千人針や、千人力等では、どうにもならぬ。唯銃後の人々の気休めである。

⑦ 千人針は自分の精神丈けのものである。然し千人針には弾丸が命中して居ない。

(八) 夢知せ

① 山中で食料の不自由を感じて居る時、毎夜亡父が夢に現はれ、食料品を持って来た。

② 戦友の夢を見たら、その戦友は戦死して居った。

(九) 御守 御守は神仏の偉力が具体的に表現したものと信じられて居る。いづれかと云へば守護と云ふ様な消極的な体験が多い。

(一〇) 神仏に対する信仰

(イ) 神国

① 【省略】

② 我が国は神国である。自分は日々神に礼拝して居る。正しき道を歩み、行を正する。何事も神に任せて働くものがある。

(ロ) 御稜威

例 自分には敵弾一発たりとも命中しないと確信して居る。我は陛下の股肱なりと常に信じて居るからである。

(ハ) 神業

例 射撃準備の時、敵の発射弾が飛び来り、一寸の違ひで一命を拾ふことが出来た。これは神業であると思った。

(ニ)

氏神 氏神に対する信仰は非常に数が多い。祭祀もられて居る神は神代より現代まで及んで居る。郷土すなわち神国に生を享け、成長してきたことに対する感謝と感激とである。

① 自分は父により常に氏神様を信すべしと訓育されて居った。この山中の困難を追撃戦に十分戦ふことが出来たのは、全く氏神様の御蔭であると痛感した。

② 日清、日露戦役以来、幾多の戦闘に於て、吾が村よりは一名も戦死者を出して居ない。これは村人が有難い氏神様の御祭をして居るからである。従って如何なる弾雨の中にあっても、斃れない自信を持って居るからである―三重県鈴鹿郡―

③ 戦場に於て激戦に参加し、生死の巷を往来して、戦友の多くは戦死して居るのに、自分丈けはこの間にあって生を全うして居ることは、全く何か自分以上の大なるもの存在を感ずる次第である。自分が今日無事なることは、此の偉

大なるものの庇護と、故国にある家族、親戚のもの熱心な祈りの御蔭である事が強く感じられる——京都帝国大学卒業、官吏、京都、相良郡予備歩兵軍曹——

(ホ) 偉大なる力

① 敵砲弾が雨、霰と飛び来る中を進撃する時は唯神仏を祈るのみである。

② 戦場に於て、人力を以てしては到底如何ともすることが出来ない場合に、偉大なる力を借りて其の場をぬけられる様神仏に御祈りをした。

西澤はこれらの事例を紹介した上で、次の節で宗教体験を規定する心理条件を六つの特徴に整理している。

一つめは、戦場という特殊な場面において必死の戦闘行為や戦闘状況の推移に伴って起るもので、日常にはあまり深刻に現れることがない心的条件である。つまり、初陣者、緒戦者、激戦者などは心的な不安や勝敗に関する真剣味などから、愛国心、敵愾心、団結心、依頼心、猜疑心、恐怖心などの情緒にともなう特殊な宗教体験が顕著に現れていると分析する。

二つめは、主に人間の本能を基礎とするもので、自己保存や自己の発展といった個人的なものより家族・郷土・国家に関するものなどが人間性の発揮にともなうて、顕著に現れているとする。これが、功名や手柄を求める祈願、家門・先祖の名誉をけがすまいという心理につながり、また、生活の安楽や安全、災難や不安を除去する祈願となって現れているという。

三つめは、戦時の社会状態・世相や、社会性、あるいは戦争が行われている時代精神・世界観・人生観などに規定される心的条件である。

四つめは、民族精神、国民性に基づくものである。「日本国体」にも

とづく風俗や習慣、歴史、伝統などが宗教体験に特殊な色彩を与えているとする。それは古来の戦だけでなく、当時の戦争においても、個人的な安楽を祈願することは希薄で、国家・郷土・家門を基礎に、「御稜威を仰ぎ、国体の尊厳さを感じ、敬神崇祖の念に燃えて居る」といったように、国民的特色を発揚していると理解している。

五つめとして、以上の条件の傾向を整理している。人間性や国民性を基準とした宗教体験は持続性をもつが、宗教情緒の表現としては地味な性質のものである。他方で戦場とか、社会面に基く体験は宗教情緒の表現がはっきりしているが持続性が少なく一貫性に乏しいので、容易に他の日常体験に置き換えられる傾向があるとするとする。

六つめとして、以上から導き出せる結論を述べている。国民に本当に強い、しっかりした宗教的信念を持たせ、その宗教的信念を永遠、恒久的なものとするためには、人間性と国民性を基軸とする心的条件によって宗教的信念を涵養させることが必要だと指摘する。

以上見てきたように、西澤による戦争体験の宗教的次元の研究には、千人針や氏神への信仰など民俗レベルでの戦争への対応が、視野に入れられており、それが濱田の進化主義的宗教論のように、低次元の宗教性として理解されているわけではない。むしろ、他の宗教性とともにあくまでも客観的な議論の一要素として扱われている。

しかし、宗教体験を規定する心的条件の特徴として六つめに指摘していることからもうかがえるように、西澤がこれらの宗教体験に注目する動機の部分には、国民の宗教的信念を涵養させるということがあり、西澤の論文の本文には表れてはいないものの、座標として図式化しているものには、「宗教体験」から「敵」にたいして矢印が向けられている。したがって、この宗教的信念の涵養をとおして敵にたいする戦闘意識の作興を意図したものであることが理解できる。

おわりに

一九三六年、宗教学会第四回大会の姉崎の会長挨拶や文部大臣祝辞において、学問の同時代性への要請が述べられていたことと、その数年後に濱田や西澤の戦争論が登場したことは直接的な影響関係はないだろうが、それらはともに当時の宗教学・宗教研究がおかれた時代性を象徴するものとして理解することが可能である。濱田や西澤の視野には、たしかに当時の前線・銃後の日本人たちの宗教的・民俗的営みが入っていたのであるが、それにたいするまなざしは、あくまで戦争遂行や天皇にたいする尊崇を第一義とするような体制的な価値判断に基づくものであった。あるいは濱田のように、たとえ「皇道主義」の国策的意図を批判するものであったとしても、それはむしろその宗教性を強調する方へとさらに先鋭化するものであった。そのような意味で、本稿における議論は、当時の宗教学・宗教研究がどの程度官製の学問であったのか、あるいは逆にどの程度国家との距離を持ちえたのかという議論、さらにはそのような性格が戦後どの程度継承されていったのかをめぐる議論に展開する必要があるだろう。残念ながら本稿ではその用意がないが、少なくとも本稿の議論の範囲から言えることは、姉崎が挨拶で主張した当事者性を、そのような体制的文脈から解放し、生活者の視点からもう一度読み直していく作業ができるのではないかということである。

参考文献

- 磯前順一・深澤英隆 二〇〇二「近代日本における知識人と宗教―姉崎正治の軌跡―
東京堂出版
- 大澤広嗣 二〇〇四「昭和前期におけるイスラーム研究―回教圏研究所と大久保幸次」『
『宗教研究』七八巻二号 日本宗教学会
- 二〇〇五「昭和前期の宗教人類学と調査研究機関―久野芳隆の場合」『ア
ジア文化研究所研究年報』四〇号 アジア文化研究所
- 二〇〇七「日本軍政下のマラヤにおける宗教調査―渡辺樺雄について」『ア
ジア文化研究所研究年報』四二号 アジア文化研究所
- 岡田弘隆 一九七七「戦時宗教総動員体制―中濃教篤編『戦時下の仏教』国書刊行会
加藤章一 一九四二「戦争に関連する宗教的儀礼について」『宗教研究』一一三号
日本宗教学会
- キサラ、ロバート 一九九七「宗教的平和思想の研究―日本新宗教の教えと実践」春
秋社
- サトウタツヤ 二〇〇二「戦前期・戦時期体制と日本の心理学―優生学・軍事・教育
との関わりを中心に」『立命館人間科学研究』第四号 立命館人間科学研究所
- 鈴木範久 二〇〇五「宗教学研究者の社会的発言」『宗教研究』三四三三号 日本宗教
学会
- 高橋原監修 二〇〇三「歸一協會叢書―歸一協會関係資料集」第二巻（第四・五・六輯）
クレス出版
- T・I 一九三四「後記」『宗教研究』八〇号
- 濱田本悠 一九三九「日本宗教の現代的課題」『宗教研究』一〇一b号 日本宗教学
会
- 林 淳 二〇〇五「戦前日本における宗教学と民族学」（日本宗教学会第六四回学術
大会紀要、自由テーマパネル「ファシズム期の宗教と宗教学―イタリア、ドイツ、
日本における」）『宗教研究』三四七号 日本宗教学会
- フィッシャー、ペーター 一九八二「宗教団体法（昭和十四年）と日本のアジア大陸
侵略との関連」『現代宗教研究』第一二六号、日蓮宗現代宗教研究所
- 西澤頼應 一九四〇「日本戦史に現はれたる宗教体験」『宗教研究』一〇六号 日本
宗教学会
- 一九四二「安心の構造―戦争と宗教に関する一問題」『宗教研究』一一〇
号 日本宗教学会
- 西村 明 二〇〇一「姉崎正治大正後期・昭和初期の理想―姉崎正治『聖徳太子御直
筆写真』」『季刊日本思想史』五九号、日本思想史懇話会

ユルゲンスマイヤー、マーク、二〇〇三『グローバル時代の宗教とテロリズム』いま、なぜ神の名で人の命が奪われるのか』明石書房
 『宗教研究』一〇二a号 一九三八
 『宗教研究』一一四号 一九四二

註

- (1) たとえば「キサラ 一九九七 第一章・第二章」など。
 - (2) 戦時下における宗教をめぐる教団史的研究や教学（神学・宗学）的研究や、戦後の教団や宗教者の戦争反省・戦争責任についての研究を指す。
 - (3) たとえば「ユルゲンスマイヤー 二〇〇三 第八章」など。
 - (4) 国家神道、戦争責任、戦死者に対する宗教的儀礼などの研究領域・テーマ群が挙げられよう。
 - (5) たとえば、「鈴木 二〇〇五」、「林 二〇〇五」、「大澤 二〇〇四」、「大澤 二〇〇五」、「大澤 二〇〇七」など。
 - (6) たとえば、「磯前・深澤編 二〇〇二」、「西村 二〇〇三」など。
 - (7) 開催月はいずれも一〇月である。
 - (8) 西澤頼応（らいおう）は一九一六（大正五）年に東京帝大哲学科心理学専修を卒業し、一九二〇年に陸軍教授となつて、翌年から陸軍で心理学を教えている（サトウ 二〇〇二・三九）。一九一八年には勝川全道とともに「現代青年の宗教心」を、姉崎の編で婦協会叢書の第六輯として出版しており、統計調査に基づく宗教心理学的研究を行っている（高橋監 二〇〇三）。
 - (9) 西澤は翌一九四一年にも「安心の構造―戦争と宗教に関する一問題」を寄稿している。これは西沢自身のことばによれば、「戦争と宗教と云ふ問題に関連し、従来研究してゐる戦場心理の立場から、戦場に於て兵及部隊が体験した心理状態を資料として安心の意識構造を考察」するものである（西澤 一九四一・一五二）。
- このほかに、一九四二年には仏教研究者の加藤章一が「戦争に関連する宗教的儀礼について」を寄稿し、密教の大元法（大元帥法）について論じている。そこで加藤は、次のように述べており、濱田や西澤と議論の前提を共有しているように思われる。「戦争のもつ多くの運命的な要素は人々をしてことに宗教的関心を深からしめ、戦争に関連した多くの宗教的儀礼を発生せしめてゐる。（中略）戦争に当面すると特に吾が国民の心情は宗教的となる傾向が強い。（中略）今日尚戦時下国民の間には各種の宗教的儀礼が行はれ、戦勝と武運長久とが神々に請願されてをり、出征兵士は弾丸除けとしての千人針をはじめ、その他の呪符、呪

持、縁起等への信仰から種々な呪術宗教的儀礼を行つてゐる。（中略）戦争は勝利か敗北か、生か死かの何れかの最後の決定を与へんとしてゐる。従つて戦争するものはあくまで戦ひ、全力を尽くして闘はねばならない。而もその最後の勝利を得るためには運と意気とを必要とする。戦ふもの間に多くの呪術宗教的儀礼の行はるるのは皆そのためであるのだが、戦争が激烈になればなるほど思付程度の呪術的儀礼はその効力を失ひ、あとには神聖なるべき戦闘意識を強化するに足る国民性と合致した宗教的儀礼のみが残されるであらう。このように考ふるとき充分に戦争に関連する宗教的儀礼は指導研究せられねばならぬと思ふ。」（加藤 一九四二・二四―二五・二九）

（鹿児島大学法文学部准教授、国立歴史民俗博物館共同研究員）
 二〇〇七年四月三〇日受理、二〇〇八年一〇月三日審査終了

The Asian-Pacific War and Religious Studies in Japan : Approach from the History of the Discipline

NISHIMURA Akira

In this paper, I would like to try to understand the social position of religious studies in Japan under the Asian-Pacific War, focusing upon that situation of the Japanese Association of Religious Studies and the war researches appearing upon the *Journal of Religious Studies*.

1930's and the former half of 40's were the pioneer days of the Association and also the days when the religious situation had changed drastically. In his address in the meeting, the president made a request for the engagement as interested parties to the members and a point of the meaning in the society of the academic interest in religions, which eventually came around with the religious policy of the Japanese government.

The papers dealing with religious phenomena under the war appeared on the Journal around 1940. They were based upon the framework of social order which placed first priority upon the conduct of the war and the reverence for the Emperor although they brought the religious and folk practices of Japanese people in that situation into view.